問 教育委員会 管理課
☎476-1111（410）

■新型コロナウイルス予防対策として

鹿児島県において、新型コロナウイルス感染症の感染状況レベルがステージⅢに近づいていると知事のメッセージもありました。今後さらに、感染防止対策を徹底し、感染拡大を防ぐことが大切です。大崎小学校では、給食のお盆にランチョンマットを活用し、飛沫の付着防止を行ったり、職員室にパーテーションを設置したりするなど、感染防止対策の強化を行っております。

◀職員室に設置されたパーテーション

■大丸小学校で研究公開がありました

1月19日（火）に大丸小学校において大隅地区「へき地・小規模校教育」研究協力校として、研究公開が行われました。大隅地区内から70名を超える参加者があり、算数科をとおした授業改善と家庭学習との関連を図った学習の基盤づくりについて、小規模の利点を生かした実践の発表が行われました。

◀研究公開の様子

まなびの窓 おしえの庭

心のオアシス「かごしま弁」

No.63 大崎町立野方小学校　校長　恐田　正行

現在、新型コロナウイルスが世界中で猛威を振るい、グローバル化の波を止め、経済や文化、教育に至るあらゆる分野で目に見えない大きなマイナス影響を及ぼしています。そんな中、海外生活ならではの強烈な思い出とそれに付随するいろいろな思いが今、頭の中を駆け巡ります。

私は、1999年4月から2002年3月までインドネシア共和国の首都にあるジャカルタ日本人学校で教壇に立ちました。赴任前年の1998年には、現地通貨ルピアの暴落に伴う経済不況と政情不安から、「ジャカルタ暴動」が勃発し、ジャカルタに住む日本人全員が国外退去を余儀なくされました。私が赴任した1999年4月以降も国民総選挙や新大統領選挙などがあり、安定しない状況のもと、日本人学校も休校や早帰りを繰り返し、全く先の読めないことに対する計り知れない生活の不安が常に付きまとっていました。

そんな時、私を精神的に救ってくれたのは、ジャカルタで生活する鹿児島県人会の皆さんのご厚意とかごしま弁でした。初めて県人会に参加した時、「先生、待っちょったど」「はよ、座いやんせ」、懐かしいかごしま弁が次から次へと飛び出します。慣れない海外生活からくる緊張感がその言葉で解放されたからでしょうか、思わず涙が溢れたのを覚えています。追い詰められた状況の中、自分の思いを何も気を使うことなくストレートに表現できるのは、やはり地元の言葉「かごしま弁」なのだと実感し、かごしま弁の持っている響きやイントネーションが心から愛しく思えました。言葉や言語の重要性については教育界でもよく取り上げられます。

しかし、方言の持っている素晴らしさや不思議な魅力についても私はもっともっと重要視すべきだと考えています。私にとってのかごしま弁は、正に心のオアシスでした。言葉には不思議な力があります。コロナ禍で世界とのつながりを制限されている今だからこそ、熱き思いをしっかりと伝えられる温かい言葉、「かごしま弁」に目を向けてみるのはどうでしょうか。